

「三人の道」

ルカの福音書 9:56～62

はじめに

今もしあなたに好きな人、大切な人がいるとして、その人がたとえば音楽が好きだとしたら、あなたはその音楽がどんなジャンルで、誰が歌い、演奏しているものかを知りたいとは思いませんか。そしてその大切な人が好きな歌を、あなたも聞いて好きになり、口ずさんであげたら、あなたとその人との関係はもっと良いものとなっていくのではないのでしょうか。私たちは神との関係において、この父なる神と全く同じ感性、感覚、思考を共有しておられる御子イエシュアとの関係において、この御方が何をみつめ、何を求め、そして何をなさそうとしておられるのかということに興味を持ち、その考え、ご計画を知り、高評価、「いいね」ボタンを押し、チャンネル登録をするように、常にそれを最大の関心事として求め続けていくなれば、神との関係は、その結びつきは、さらにいっそう固く、強く、素晴らしいものになっていくのではないのでしょうか。そのようなわけで、今日も神の見つめておられるそのご計画についてお知らせしてまいります。どうか一人ひとりに聖霊の助けがあり、これを受け取ることができますように、イエシュアの御名によって。

1. どこに行かれても

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:56 そして一行は別の村に行った。

9:57 彼らが道を進んで行くと、ある人がイエスに言った。「あなたがどこに行かれても、私はついて行きます。」

9:58 イエスは彼に言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところもありません。」

今日の箇所にはイエシュアのみそばに名もなき三人の人が一人ずつ順番に登場してまいります。イエシュアは彼らに対し、それぞれ異なった御言葉をもって関わっておられます。ここには神のご計画における異なる三つの存在が指し示されており、この三人はその「型」となっているのです。ではそれがどのようなものを順番に見てまいりましょう。まず最初の人には「あなたがどこに行かれても、私はついて行きます。」と自らイエシュアを求めている人、イエシュアの弟子となることを望む人のようです。そんな彼らに対しイエシュアは「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところもありません。」と、返答をしておられます。多くの場合、これは弟子の道は寝る時間も場所もないほどに辛く厳しいぞ、それでもついて来るか？というような忠告、条件を提示している言葉のように受け取ってしまいます。しかしここにはイエシュアが、そしてイエシュアについて行く者がやがてどこに行くことになるのかということが示されているのです。では「狐には穴があり、空の鳥には巣がある」というイエシュアのたとえに

目をとめてください。まずは「狐」について、このルカの福音書において、それはある人物を指し示しています。

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:31 ちょうどそのとき、パリサイ人たちが何人か近寄って来て、イエスに言った。「ここから立ち去りなさい。ヘロデがあなたを殺そうとしています。」

13:32 イエスは彼らに言われた。「行って、あの狐にこう言いなさい。『見なさい。わたしは今日と明日、悪霊どもを追い出し、癒やしを行い、三日目に働きを完了する。』

このようにイエシュアはご自分を殺そうとしている「ヘロデ」に対し、彼を「狐」と呼んでいます。つまりイエシュアに敵対する王、神に逆らう権力者を指す言葉、それがこの「狐」というたとえには表されており、その「狐には穴があり」とは、神に逆らう王、究極的には神の敵である悪魔の子である獣、反キリストが権力者となって穴、棲み処、居城をこの地に構え、地上を統べる王として君臨し、かつてのヘロデのように、イスラエル、ユダヤ人を支配するようになることを預言しているのです。

次に「空の鳥」については、同じくルカの福音書でイエシュアはこのようにたとえておられます。

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:5 「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いていると、ある種が道端に落ちた。すると、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。

8:11 このたとえの意味はこうです。種は神のことばです。

8:12 道端に落ちたものとは、みことばを聞いても信じて救われないように、後で悪魔が来て、その心からみことばを取り去ってしまう、そのような人たちのことです。

このように「空の鳥」とは神のみことばを取り去る「悪魔」を指しています。つまり「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところもありません。」とは、獣と悪魔であるサタンが地上を支配し、イエシュアがそこにおられない世界、世の終わりの大患難についての預言が、ここにたとえられているのです。「人の子には枕するところもありません。」とは、直訳では頭を置く場所がない、となり、それはイエシュアが民の頭（かしら）である王としてまだそこにおられない、来られていないこと、すなわち地上再臨の前の状態を指しており、その時イエシュアは天におられます。ですから「あなたがどこに行かれても、私はついて行きます。」と言ったその人もまた同じように天に行く人、地上から引き上げられる人、すなわち携挙される人を指しているのです。私たち教会がこれに当てはまります。ですからこの「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところもありません。」というたとえは、イエシュアに従う者が困窮し、苦難にあうことを記したのではなく、終わりの日の大患難の時には、この地上から引き上げられ、天においてイエシュアとともにいることになる、という素晴らしい約束、神のご計画としての良い知らせ、私たちにとっての救いの福音なのです。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

4:18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

そして「あなたがどこに行かれても、私はついて行きます」とありますから、やがてイエシュアが地上の「狐」と「空の鳥」獣と悪魔を打ち払い、これを滅ぼすために地上に再臨される時もまた私たちはイエシュアについて行くことになり、地上における「神の国」において、私たちもイエシュアとともにそこに住まうことになるのです。

2. 従って来なさい

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:59 イエスは別のの人に、「わたしに従って来なさい」と言われた。しかし、その人は言った。「まず行って、父を葬ることをお許しください。」

次の人は先ほどの人とは違い、イエシュアの方から「従って来なさい」と呼びかけておられます。つまりイエシュアが、神がお選びになった存在、それはすなわちイスラエルの民、ユダヤ人の存在がこの人のうちには表されているのです。しかし彼はイエシュアに従うことよりも「まず行って、父を葬ることを第一としました。ユダヤ人はみな民族意識が強く、先祖を自分の家族同然の身近な存在として扱います。彼らにとって父祖アブラハム、イサク、ヤコブからなる先人たちは、すでに死んで多くの時間が経過していても、決して忘れてはならない、忘れることのない最も重要な存在なのです。そんなユダヤ人の姿が表されたこの人に対してイエシュアが語られた、たとえとしての御言葉が次です。

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:60 イエスは彼に言われた。「死人たちに、彼ら自身の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」

これは一体どういう意味でしょうか。死人が死人を葬ることなどできません。しかしイエシュアはここでご自分に聞き従わない、ついて来ない者はもはや死んだも同然だと言っておられるのです。今日、未だ多くのユダヤ人がイエシュアを信じて聞き従うどころか、その存在すら認識していません。しかし先ほどの箇所にも表されていた獣と悪魔が地上を支配する時代、世の終わりの大患難には、「イスラエルの残りの者」と呼ばれるイスラエルの十二部族 144,000 人の民が召し出され（黙示録 7:4）、まさに「あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」というこの御言葉に従い、御国の到来を告げ知らせる、イエシュアの再臨を待ち望む者として現れます。彼らは獣と悪魔の執拗な攻撃、迫害の中にあっても、「死人」となることはなく、決して害を受けず、まさに「死人」の中から「出て行って、神の国を言い広め」、最後まで

で生き残るのです。そのような存在としてのイスラエルの民についての神のご計画が、この人にはたとえられているのです。

3. うしろを見る者

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:61 また、別の人が言った。「主よ、あなたに従います。ただ、まず自分の家の者たちに、別れを告げることをお許してください。」

9:62 すると、イエスは彼に言われた。「鋤に手をかけてからうしろを見る者はだれも、神の国にふさわしくありません。」

そして三人目のこの人は「主よ、あなたに従います」と言いながら、イエシュアを第一、唯一の従うべき存在とせず、実は常に「まず自分の家」を重んじ、自分を偽り、イエシュアを裏切る者です。イエシュアの十二弟子のひとり、イスカリオテのユダがそのような人でした。またソドムとゴモラの滅びから脱出したロトの妻もまたそのような人と言えます。彼女は救われたにもかかわらず、御言葉に従いませんでした（創世記 19:26）。イエシュアはこのような者を「鋤に手をかけてからうしろを見る者」とたとえられました。この「鋤」とは畑を耕すための道具、農具の一種ですが、これを武器である剣に打ち直して神に反逆する者の存在が以下に預言されています。

ヨエル書【新改訳 2017】

3:4 ツロとシドン、またペリシテの全地域よ。おまえたちは、わたしにとって何なのか。わたしに報復しようとするのか。もしわたしに報復しようとしているなら、わたしはただちに、速やかに、おまえたちへの報いをおまえたちの頭上に返す。

3:5 わたしの銀と金をおまえたちが奪い、わたしのすばらしい財宝をおまえたちの神殿へ運び、

3:6 ユダの人々とエルサレムの人々をギリシア人に売って、彼らの領土から遠く離れさせたからだ。

3:7 見よ。わたしは、おまえたちが彼らを売ったその場所から彼らを呼び戻して、おまえたちへの報いをおまえたちの頭上に返し、

3:8 おまえたちの息子、娘たちをユダの人々に売り渡す。彼らはこれを、遠くの異邦の民シェバ人に売る。——【主】は言われる。」

3:9 「国々の間で、こう叫べ。聖戦を布告せよ。勇士たちを奮い立たせよ。すべての戦士たちを集めて上らせよ。

3:10 あなたがたの鋤を剣に、あなたがたの鎌を槍に打ち直せ。弱い者に『私は勇士だ』と言わせよ。

3:11 周りのすべての国々よ。急いで来て、そこに集まれ。——【主】よ、あなたの勇士たちを下らせてください——

3:12 諸国の民は立ち上がり、ヨシャファテの谷に上って来い。わたしがそこで、周辺のすべての国々をさばくために、座に着くからだ。」

この預言は「ツロとシドン、またペリシテの全地域」すなわちイスラエルに敵対し「ユダの人々とエルサレムの人々」を苦しめた「諸国の民」に対する預言です。主なる神はこの国々に「鋤を剣」に替えて集まって来い、神に戦いを挑み、立ち向かって来いと挑発しておられるのです。しかし「わたしはただちに、速やかに、おまえたちへの報いをおまえたちの頭上に返す」と言っておられ、これら「諸国の民」を返り討ちにされます。このように「鋤」はイスラエルとその神に対する裏切り、反逆を指し示す象徴であると言えます。つまり「鋤に手をかけてからうしろを見る者」とは、鋤を剣に打ち直し、神に背を向ける者、背信、背教、裏切る者を指しているのです。このイスラエルの神に反旗を翻す「諸国の民」の存在は、ヨハネの黙示録にこのように預言されています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

20:7 しかし、千年が終わると、サタンはその牢から解き放たれ、

20:8 地の四方にいる諸国の民を、すなわちゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。彼らの数は海の砂のようである。

20:9 彼らは地の広いところの上って行き、聖徒たちの陣営と、愛された都を包囲した。すると天から火が下って来て、彼らを焼き尽くした。

20:10 彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには獣も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。

やがてイエシュアは携挙された私たち教会を引き連れて地上再臨され、獣とその軍勢を打ち滅ぼし、サタンを捕らえてこれを「底知れぬ所」に封印します（黙示録 20:3）。そしてイスラエルの残りの者を救い、彼らとともに「千年」の王国「神の国」を建てられます。その時そこには 144,000 人の「イスラエルの残りの者」以外に、この「諸国の民」もいます。彼らは私たち教会と同じように「神の国」の民として迎えられます。それはかつてイエシュアが、イスカリオテのユダがやがてご自分を裏切ることを知っていながら弟子に加えられた事実とつながります。このユダは、まさにサタンによって、サタンが彼の中に入ることによって裏切ったのです（ルカ 22:3）が、それは上記の預言を指し示す「型」と言えます。「ゴグとマゴグ」と呼ばれるこの「諸国の民」は、「千年」の終わりには封印から解き放たれるサタンとともに「聖徒たちの陣営と、愛された都」すなわちイスラエルとその首都エルサレムに対して反旗を翻します。しかしその結末はご覧の通りで、先ほどのヨエル書の預言と同じく悲惨なものとなります。ちなみに「ゴグとマゴグ」という名の意味について、「マゴグ」は「ゴグの地」という地名で「ゴグ(גוג)」は「屋根、上部、山」などという意味があり、本来は幕屋の聖所において契約の箱の最も近くに置かれる金の香壇(の上面、天盤)を指す言葉です（出 30:3）。またゲマトリアは 3+6+3=12 です。つまりゴグという名にはイスラエルの 12 部族のように、これに取って代わり、自分が上の存在、神にも等しい最も高い地位に上ろうとする者、という意味があるのです。さらに、エステル記において、ユダヤ人を根絶やしにしようとしたハマンという男がいましたが、彼はアガグ人であったとあり（エステル 3:1）、このアガグ(אגג)という名の中にゴグの名を見つけることができます。そしてこのハマンという男もまたユダヤ人に敵対した結果、やはり悲惨な最期を迎えています（エステル 7:10）。

イエシュアはこのような裏切り者は「神の国にふさわしくありません」と言われたのです。ここに使われているカーシエール(קָשְׁיָהוּ)は「成功する、うまくいく」という意味の言葉です。つまり「神の国」に入れないのではなく、入れはしてもそこで成功しない、「神の国」において最後には失敗すると言っておられるのです。それはまさに上記の預言に記された千年王国の終わりにサタンに従い、イスラエルの主を裏切り、反逆する者、鋤を剣に打ち直し、神に背を向け、その結果、天からの火で焼き尽くされ、滅ぼされ、まさに成功しない、失敗する「諸国の民」「ゴグとマゴグ」を指し示しているのです。

このような、神を裏切る者の存在は、聖書の様々な箇所¹に指し示されています。先ほども述べたロトの妻や、イスカリオテのユダなどもそうですが、やはりその究極、典型は悪魔、サタンでしょう。彼は最初「全きものの典型であった。知恵に満ち、美の極み」と言われた「油注がれた守護者ケルビム」でした(エゼキエル 28:12~14)。しかしやがて「心の中で…『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山で座に着こう。』」(イザヤ 14:13) と言って高慢になり、創造主でられる神に逆らい、裏切ったのです。以下の預言にこうあります。

エゼキエル書【新改訳 2017】

28:12 「人の子よ、ツロの王について哀歌を唱えて、彼に言え。【神】である主はこう言われる。あなたは全きものの典型であった。知恵に満ち、美の極みであった。

28:13 あなたは神の園、エデンにいて、あらゆる宝石に取り囲まれていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、縞めのう、碧玉、サファイア、トルコ石、エメラルド。あなたのタンバリンと笛は金で作られ、これらはあなたが創造された日に整えられた。

28:14 わたしは、油注がれた守護者ケルビムとしてあなたを任命した。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いていた。

28:15 あなたの行いは、あなたが創造された日から、あなたに不正が見出されるまでは、完全だった。

28:16 あなたの商いが繁盛すると、あなたのうちに暴虐が満ち、こうしてあなたは罪ある者となった。そこで、わたしはあなたを汚れたものとして神の山から追い出した。守護者ケルビムよ。わたしは火の石の間からあなたを消え失せさせた。

この預言は悪魔サタンについての預言ですが、その呼び名は「ツロの王」となっています。このツロという国はダビデ、ソロモンの時代、イスラエルの同盟国でした。しかし後にツロは裏切ったのです。こう記されているとおりです。

アモス書

1:9 【主】はこう言われる。「ツロの三つの背き、四つの背きのゆえに、わたしは彼らを顧みない。彼らがすべての者を捕囚の民としてエドムに引き渡し、兄弟の契りを覚えていなかったからだ。

1:10 わたしはツロの城壁に火を送る。その火はその宮殿を焼き尽くす。」

このアモス書にはいくつものイスラエル周辺諸国に対する主の怒りとさばきが記されていますが、このツロだけが「兄弟の契りを覚えていなかった」とあるように、イスラエルとの平和の同盟、条約、契約を途

中で破棄するという裏切りの罪が責められています。このように、「神の国」の民として選ばれ、結ばれ、救われていながら、やがてイスラエルの主とその民に反旗を翻す、裏切る「**諸国の民**」ゴグとマゴグとも呼ばれる者たちの存在が「**鋤に手をかけてからうしろを見る者はだれも、神の国にふさわしくありません。**」とたとえられたイエシュアの御言葉には指し示されているのです。そしてその数は、残念ながら決して少なくはなく、「**彼らの数は海の砂のようである**」まさにだれも数えきれないほどの大勢の群衆であると黙示録は記しています。しかし、どれだけ数が多くと、力が強くと、**「聖徒たちの陣営…愛された都」**であるエルサレムに敵対する者は「神の国」では祝福されず、成功せず、必ず立ち滅ぼされます。

4. 愛された都

今日の内容をふまえ、覚えていただきたいことはエルサレムの重要性、その価値の絶大さです。今日の冒頭で述べた、神の好きなもの、その選ばれた「**愛された都**」について、私たちはこれを知ることをもっともっと求めていくことが、神との関係を、イエシュアとのつながりをさらにさらに強固に、そして美しく、豊かにしていくものとなることを信じます。そのようにして私たちもまたこのエルサレムを愛する者となることを、そのように変えられていくことを知り、ぜひ求めていただきたいのです。それがイエシュアが言われた「神の国」を第一に求めることであり、サタンに惑わされた諸国の民ゴグのような裏切りに陥らないようにするためです。しかしそれはエルサレムの街とその民を愛してその祝福を祈ることよりも、このエルサレムに、神であられる主イエシュアが来られる、そこにとどまられる、常におられるようになる日を求めるということです。預言者エゼキエルはその預言の最後に、このエルサレム、この街の名は「その日から『【主】はそこにおられる』となる。」(エゼキエル 48:35)と締めくくっています。主イエシュアが来られ、住まわれるエルサレム、私たちもこの成就、実現を願い、見つめ続けていく者となりますように。私たち教会にとっては携拳が救いであり希望です。しかし述べたように、イエシュアはエルサレムを、そこに住まうことを愛して、求めておられるのです。ならば私たちもともにそれを願い、求め、待ち望む者となるべきではないでしょうか。

そして「神の国」千年王国、メシア王国建国のあかつきにはエルサレムの存在はいよいよ絶大なもの、絶対的なものとなります。

イザヤ書【新改訳 2017】

2:2 終わりの日に、【主】の家の山は山々の頂に堅く立ち、もろもろの丘より高くそびえ立つ。そこにすべての国々が流れて来る。

2:3 多くの民族が来て言う。「さあ、【主】の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を私たちに教えてください。私たちはその道筋を進もう。」それは、シオンからみおしえが、エルサレムから【主】のこゝばが出るからだ。

今日から「主イエシュアよ、来てください。」という祈りに二つの意味を込めましょう。一つは私たちが携拳されるために、そしてもう一つはエルサレムに主イエシュアが来られる日を待ち望んでこの祈りを祈ってまいりましょう。御国が来ますように、いや、御国がエルサレムに、エルサレムから全地に広がっていきますように。